



芸術振興に尽力し続ける 坂城美術界の重鎮、そして起業家



おじゃまします

さかき新企業人インタビュー⑬

若林武雄さん(雅号 武新)プロフィール
造園の花州園・おしぼりうどんの花州苑
八重 代表

昭和8年、戸倉生まれ。履物職人として家業を継ぐが、30代半ばに造園業に転業。業績を伸ばす一方、華道教授・彫刻家として美術界で活躍。さらに、地元へ美術団体を創設するなど芸術振興に尽力。近年は郷土食「おしぼりうどん」の専門店を出店するなど町おこしにも一役買っている。

第一美術協会運営委員・日新名誉教授審査員・
創造学園大学芸術学部講師等

お話を聞いてみると企業人というより芸術家。その経歴は有力美術団体の運営委員、華道団体の理事長、評議委員を歴任するなど長野県の美術界にとっても重鎮といえる存在だ。ところがその一方で、生業として造園業を営み、郷土食店を開くなど企業家としての側面も。「2足のわらじ」どころか、5足、6足も履き、しかもそれらすべてが生業として成り立っている。

——経歴をお聞かせください。

「高校を卒業して家業を手伝いましたが、何か一生続けられる習い事はないかと考えました。戦後の荒廃した時代です。心の拠り所というか清めてくれるものとして『書』を習い始めました。師事した先は高名な川村驥山の弟子、正村八洲先生です。楽しくて、一生懸命勉強して展覧会で賞もいただけるようになりました。ところが書道は実にお金がかかる。良い硯や筆、墨はとも高価です。せめてもう少し良い道具を使いたい、と

考えて、下駄の材料の桐材で儲けられないかと農家を回って材料を買い、仕入れの親父さんに買ってもらいました。」

——次がいけばな？

「実家の兄がお花の先生で、最初は私が習うのではなく、生徒を集めて華道塾を開きました。そのうち生徒さんに混じって稽古を始めんですが、実に面白い」

——なかなかお仕事の話がでてこないのですが(笑)

「仕事も美術もどちらも生業です。別々には語れません。でもここから少し家業の話をしましょう(笑)。

当時の華道界は花を使わず骨や石でオブジェを制作するといった前衛的、アバンギャルドが世界的ブームでした。私も鉄を素材にオブジェを作り、展覧会で認められ造形作家として独り立ちできるようにになりました。一方、実家が造園業だったこともあり、華道を研究するには造園をやるべきと師匠筋の方にアドバイスされ、勉強のために造園業を始めました。34、35歳頃です。しかし知れば知るほどどころにも奥が深い。結局、

家業の履物店をやめて造園業「花州園」をはじめました。

——お仕事も芸術活動も一つの線で結ばれていることが分かります。造園の仕事はいかがですか？

「作庭もいけばなも根は同じです。生き物であり造形美である。美術界に長く居りますので、そういう意識を常に持っています。感性や発想を豊かにし、少なくとも100年は残せる庭を目標に、仕事に取り組んできました」

——最後に「おしぼりうどん」について。

「10年前、家の改築にあたり、美術館やギャラリーがあれば地元の美術家の発表の場になるし、名物があれば観光面で町のお役に立てるかもしれないという発想から、坂城で昔から食べられていた「おしぼりうどん」の専門店を始めました。この地で採れる辛みねずみ大根を使い、素朴だけれど体にやさしくおいしい郷土食なら地元の方にも観光客にも喜ばれるはず、と考えオープンしました。お陰様で遠来からも多くのお客さまがいらしてくれます」